

モンゴル国のカザフ音楽 アーカイブズ・アルトゥンコル — その設立と維持

八 木 風 輝

【要 旨】

旧ソ連圏にある音楽アーカイブズは、首都に設立された音楽アーカイブズの設立と維持が従来報告されてきた。本稿は、旧ソ連の衛星国であったモンゴル国の最西部に位置するバヤンウルギー県を対象とし、そこに1960年代に設立された音楽アーカイブズを取り上げる。バヤンウルギー県は、少数民族のカザフ人が県人口の9割を占めている。バヤンウルギー県の県庁所在地にあたるウルギー市には、バヤンウルギー県地方ラジオ・テレビ局があり、局内に「アルトゥンコル」という音楽アーカイブズがある。設置当時から、当県のカザフ音楽の演奏を磁気テープに記録・収録する活動が行われてきた。現在、アルトゥンコルには、2000曲を超える社会主義期に録音されたカザフ語、モンゴル語、ロシア語の音源が保管されている。本稿は、筆者が2018年にアルトゥンコルでのデジタル化に参加した際のデータを用い、アルトゥンコル設立の過程、収録シリーズの特徴、収録音源の詳細、保存環境について考察する。社会主義体制が崩壊した後、保存媒体である磁気テープを維持する環境や、デジタル化に様々な課題を抱えているが、アルトゥンコルに収録された曲は、社会主義期にモンゴル国のカザフ人が演奏した音楽を再現できる可能性を持ち、社会主義期の演奏実態を解明する一助となる。

【目 次】

1. はじめに
 - (1) 社会主義圏の音楽アーカイブズ
 - (2) 調査地と音楽アーカイブズへの参与
2. バヤンウルギー県ラジオ局と音楽アーカイブズ・アルトゥンコル
3. アルトゥンコルのシリーズの特徴
4. 収録音源の内容
 - (1) 自然の表象
 - (2) 当時のポピュラー音楽
5. 音楽アーカイブズ資源の保管状況
6. 結論と展望：社会主義期の音を残すこと

1. はじめに

(1) 社会主義圏の音楽アーカイブズ

本稿は、モンゴル国のバヤンウルギー県地方ラジオ・テレビ局¹⁾にある音楽アーカイブズ部門・アルトゥンコル (Алтын Кор: Altyn Qor) を取り上げる。そして、アルトゥンコル設立の過程、収蔵シリーズの特徴、収蔵音源の詳細、保存環境について考察する。

音楽は世界各地で存在する表現形式であり、民族音楽学は、音楽の地域的・民族的な特徴や、文化の中の音楽の位置づけを研究してきた。民族音楽学と録音技術は、その学問的な前身にあたる比較音楽学の時代から密接な関係を持ち、100年以上の蓄積を持っている。蠟管 (wax cylinder)、LPレコーダーやテープレコーダー、現在ではICレコーダー等によるデジタル音源を用いて、研究者は調査対象である音楽の録音を行ってきた。こうした録音された音源は、各地の音楽アーカイブズに保管されてきた。

2000年代初めに、音楽アーカイブズは各地の民族集団の音楽を保存する機関として関心を集め、世界各地の音楽アーカイブズの設立とその現状が多数報告された。これらの報告の中には、旧ソ連圏の一部であったスロバキア、ポーランド、エストニアの東欧圏の事例も紹介された²⁾。旧ソ連圏から紹介されたアーカイブズでは、各地の科学アカデミー (研究所) による音源の収集と、マスメディア (主にラジオ局) のアーカイブズが取り上げられた。旧ソ連圏の音楽アーカイブズの特徴をまとめるならば、中央と周辺の間を構造化しているところにある。すなわち、社会主義期に首都に設立された国営機関が地方に住む人々の音楽を収集して保管した点があげられた。

本稿で取り上げる音楽アーカイブズは、旧ソ連圏の一部であり、衛星国であったモンゴル国に設立されたものである。しかし、周縁の国境地域に設立され、その地域に住まう少数民族の音楽が保存された音楽アーカイブズである点に特徴がある。

(2) 調査地と音楽アーカイブズへの参与

モンゴル国は、人口約320万人を擁する東アジア北部の国である。1911年の辛亥革命によって清朝から独立したモンゴル地域の一部が、1924年にソ連によって社会主義体制に編入された。モンゴル人民共和国として、ソ連の衛星国としての役割を担うと同時に、ソ連的な近代化を通じて都市や農業の発展が目指された³⁾。1991年に民主化し、モンゴル国として独立した。

社会主義期のモンゴル国内では、民族集団の識別も行われた。モンゴル国の民族は、21に分けられ、ハルハ人がモンゴル国人口の8割を占めた。一方で、本稿が対象とするカザフ人は、ハルハ人に次いで2番目の人口を有する民族集団である。カザフ人は、中央アジアのカザフスタンを中心に中国やモンゴル国、ロシア連邦といった国家に跨り居住する民族である。彼らは、

1) 設立された1965年から1990年までバヤンウルギー県ラジオ局であり、それ以降はバヤンウルギー県地方ラジオ・テレビ局と名称が変更された。

2) Berlin, Gabriele, and Simon, Artur, eds. *Music archiving in the world : papers presented at the conference on the occasion of the 100th anniversary of the Berlin Phonogramm-Archiv*. Verlag für Wissenschaft und Bildung: Amand Aglaster, 2002.

3) 小長谷有紀『モンゴルの二十世紀—社会主義を生きた人びとの証言』東京：中公叢書、2004。

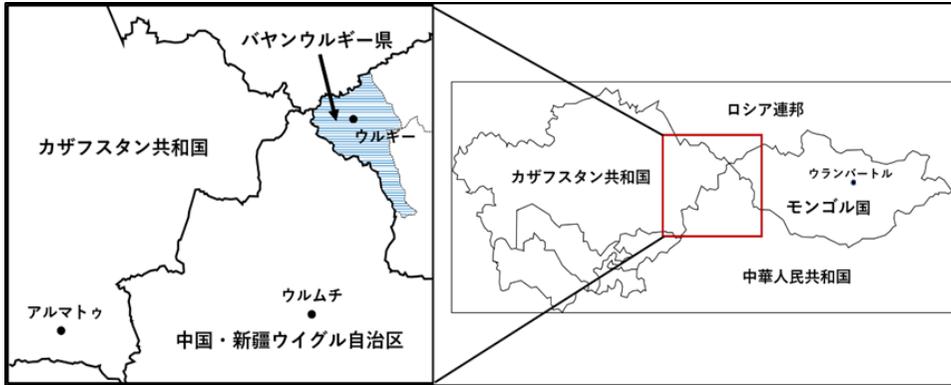


図1 バヤンウルギー県の位置

仏教徒でモンゴル語を話すモンゴル人とは異なり、イスラームを信仰しカザフ語を話す人々である。当然、モンゴル人とカザフ人の間の習慣や文化の相違も大きい。

モンゴル国に住むカザフ人は、主にバヤンウルギー県（Bayan-Ölgiy province）という、モンゴル国首都ウランバートルから約1700キロメートル離れた県に集住している。社会主義期の1940年に設立されたバヤン



写真1 山岳地帯での牧畜（2014年筆者撮影）

ウルギー県は、現在に至るまで県人口の9割（約9万人）がカザフ人を占めており⁴⁾、実質的なカザフ人自治県として認知されている。当県は、ロシア連邦と中国・新疆ウイグル自治区に接しており、50キロ西部にはカザフスタンの国境が存在する（図1）。

県内は山がちな場所が多く、砂利でできた山に囲まれている。この山がちな環境下で、カザフ人はヒツジ・ヤギ・ウマ・ウシ・ラクダという五つの家畜の牧畜を行っている（写真1）。

モンゴル国のカザフ人は、牧畜に関係する日々の出来事や自然を歌として残してきた。彼らは、現代に至るまで、宴やコンサートなどで自分が知っている曲を人々に披露してきた。しかし、音は、常にその曲が歌われた場でしか共有できないため、ある時に歌った曲が時代を越えて共有されるということは少なかった。特に、社会主義期の状況を知るためのデータとなる音源が非常に少なく、音楽の歴史的な演奏の考察が困難であった。社会主義期には、西側諸国の研究者らの調査も禁止されていたため、一般的に社会主義体制が崩壊し、調査地に入れるようになった1990年代以降のモンゴル国のカザフ音楽を研究者らは論じてきた⁵⁾。

4) Bayan-ölgii Aimagiin statistikiin kheltes (バヤンウルギー県統計局) 2018 *Bayan-ölgii Aimagiin Statiskiin emkhetgel 2017on*, Ulaanbaatar.

5) Post, Jennifer C. 'I Take My "Dombra" and Sing to Remember My Homeland': Identity,

筆者は、2010年に初めてバヤンウルギー県へ来訪し、バヤンウルギー県にある劇団の演奏者の一員として活動しながら、モンゴル国のカザフ音楽の調査を進めてきた。筆者は、現代のモンゴル国のカザフ音楽の理解するために、社会主義期のカザフ音楽の演奏実態の把握が不可欠であると考えた。社会主義期に出版された楽譜集や民謡集の内容を、現地の劇団の活動と関連させて明らかにした⁶⁾。この調査過程で発見したのが、本稿で述べるバヤンウルギー県地方ラジオ・テレビ局音楽アーカイブズ部門・アルトゥンコルである。

本稿で示すデータは、2018年1月から2018年8月まで、モンゴル国バヤンウルギー県地方ラジオ・テレビ局で音楽アーカイブズ・アルトゥンコルの音源のデジタル化作業に従事する中で経験したこと、および関係者への聞き取りに基づいている。

2. バヤンウルギー県ラジオ局と音楽アーカイブズ・アルトゥンコル

バヤンウルギー県には、地元に着したメディアとして、バヤンウルギー県地方ラジオ・テレビ局がある。1965年に開局して以降、1991年の社会主義体制崩壊以降も継続して、バヤンウルギー県のカザフ人に日々の出来事をカザフ語で1時間のラジオ放送を通じて伝達してきた。毎日午後9時から1時間放送されることから、この番組を「トゴズ（9の意味）」と呼ぶ。この番組は当県の出来事を伝える唯一の番組であり、町に住むカザフ人や地方で牧畜を営むカザフ人から親しまれている。

このラジオ番組は、現在は、現地でコンピューターにより製作・収録されている。しかし、1965年から1990年の社会主義期には、ウランバートルでモンゴル語のラジオ番組を収録した磁気テープをバヤンウルギー県に送付し、それをカザフ語に翻訳して放送していたという。また、社会主義後期には、テレタイプという電信を用いた文字資料を送付し、これをカザフ語に翻訳して、バヤンウルギー県ラジオ局で収録し放送していたという。

当ラジオ局が1965年に設立された背景として、1960年代に起こった中ソ対立があげられる。モンゴル国では1934年に「モンゴルラジオ」という国営のラジオ局が開局し、ラジオ放送は国内の人々に広く普及した。しかし1950年代以降に、モンゴルラジオは国内向けの放送だけではなく、モンゴル国外への情報発信なども行うようになった。

1960年代、ソ連の指導者だったスターリンの死後、中国とソ連の関係が悪化し国交の断絶に近い状況にまで陥った。いわゆる中ソ対立である。ソ連側では中国への宣伝と情報の傍受に、当時ソ連の衛星国であったモンゴル国を利用し、モンゴル国から北京（中国語）、内モンゴル自治区のフフホト（モンゴル語）、新疆ウイグル自治区のウルムチ（カザフ語）へ向けたラジオ放送を開始した⁷⁾。この新疆ウイグル自治区への情報の拡散を目的に開局したのが、バヤンウルギー県ラジオ局であった。この国外への情報発信のために、首都のウランバートルに次い

Landscape and Music in Kazakh Communities of Western Mongolia. *Ethnomusicology Forum*, vol. 16 (1), 2007, pp. 45-69.

6) Yagi, Fuki. Systematization of Kazakh music in Mongolia: activities of theater and radio station during the Soviet era. *Asian Ethnicity*, 2019.

7) Rakhmetüli, S. *Jel Qanat* Qos. Ulaanbaatar: Ceiji Press, 2005.

で2番目に設立されたラジオ局であった。

ラジオ局での番組放送の技術は、当時援助関係にあったチェコスロバキアの技術者が数名派遣されることで賄われていた。技術者は1960年代末までバヤンウルギー県ラジオ局内で活動していた。この当時、ラジオ局で用いられていた再生機や録音機が、東欧で制作されていたものであったのも背景にあると考えられる。

ラジオ番組を収録した磁気テープ（写真2）はソ連からウランバートルを經由しバヤンウルギー県ラジオ局に持ち込まれた。写真2の磁気テープは、社会主義圏の一つであった北朝鮮のピョンヤン（平壤）ラジオの磁気テープである。これは、北朝鮮からソ連を經由し、モンゴル国に持ち込まれた後、モンゴル語のラジオ番組を収録して、ウランバートルからバヤンウルギー県のラジオ局に持ち込まれたと考えられる。その他にも、ソ連のウクライナ製や東ドイツ製の磁気テープが、バヤンウルギー県ラジオ局に持ち込まれていた。



写真2 大型の磁気テープ（2018年筆者撮影）

これらの磁気テープは、ウランバートルで番組をモンゴル語で録音した後、バヤンウルギー県に輸送された。そしてその内容をカザフ語に翻訳して放送していた。

こうして多数の放送用の磁気テープが保管された「倉庫」が、現在のアルトゥンコルである。また、ラジオ局員によって1970年代以降のバヤンウルギー県の奏者らの演奏曲が、磁気テープに録音された。最終的に、約1000曲の地元の演奏者の曲が残された。

これらの磁気テープに対して、その中の音楽の内容・演奏者・収録年などの目録化と整理が行われた。バヤンウルギー県音楽ドラマ劇団⁸⁾の指揮者であったティレウハンは、1975年にバヤンウルギー県ラジオ局に所属を変更し、約半年間、アルトゥンコルに保存された曲の整理と目録化を行った。ティレウハン以降は、同劇団の演奏者であったカップという人物が、社会主義体制が崩壊するまで、アルトゥンコルの整理を行っていた。彼らが整理しまとめた目録は現在でも参照されている。

3. アルトゥンコルのシリーズの特徴

2章の最後で述べたアルトゥンコルの目録は、1975年以降に断続的に制作されてきた。その基礎は1975年にティレウハンが作成したものである。その際、シリーズと呼ばれる収録音源の分類の枠組みが作られ、磁気テープとそのカバーにシリーズと番号を記入して対応させている。目録には、下の表1のように7種類の分類がある。また、現在、この分類は、社会主義体制崩

8) バヤンウルギー県音楽ドラマ劇団は、1956年に落成し、カザフの楽器を用いたオーケストラや声楽クラス、舞踊クラスの3つの部門に分かれていた。

壊後にモンゴル国で出版された『機関のアーカイブズ化の基本マニュアル⁹⁾』の内容に基づき管理されている。このマニュアルの4章「保管の単位の編纂、シリーズ、シリーズへの登録作業」では、シリーズの作成に関して、マニュアルの執筆者の経験に即した記述がある。そこでは、「シリーズの編纂やシリーズへの登録の前に、機関の歴史的な方向性と編集整理の体系を通じて、(訳註:シリーズの内容を)洗練した(p.8)」と書かれている。アルトゥンコルのシリーズは、こうしたマニュアルの内容も根拠にして、維持されていると考えられる¹⁰⁾。

このシリーズの分類の特徴は、どこで収録されたか(県内/県外)と、演奏者の専門性の有り無し(劇団員/非劇団員)である。アルトゥンコルに収録される磁気テープは、まず県内で収録した曲(Өл, О, Ө, А)か、県外で収録された曲か(Мон, Қаз, Бал)で分類する。その上で、県内で収録した曲は、バヤンウルギー県音楽ドラマ劇団の奏者か、それ以外に分類される。ただし、バヤンウルギー県では社会主義期から非劇団員が劇団員に職を変える事例も多かったため、全てがこの組み合わせに当てはまっているわけではない。

県外から来た音楽(Мон, Қаз, Бал)では、カザフスタンもしくはモンゴル(ウランバートルで収録された)の音楽で分類される。その音楽の内容は、いずれもカザフ音楽、モンゴルの音楽、ロシア音楽に分類できる。

各シリーズの曲数を、表1の右部に示した。現在のところ筆者が把握している磁気テープの本数は、県内の音楽の一部に限られており、その全体像を掴むまでには至っていない。まだ把握されていない県外の音楽の磁気テープの数は、県内のデジタル化済みの磁気テープとほぼ同数存在するとみられており、今後のデジタル化が待たれる。

表1 アルトゥンコルの収蔵音源の内訳

	シリーズ	内容	磁気テープ本数	デジタル化済み本数
県内の音楽	Өл	現地の劇団員による演奏	393	370
	О	Өлの続き	234	201
	Ө	非・劇団員による演奏	不明	522
	А	ラジオ番組		
県外の音楽	Мон	モンゴルの音楽	デジタル化・枚数の計算されず	
	Қаз	カザフスタンからの音楽		
	Бал	子供向けの音楽		

4. 収録音源の内容

アルトゥンコルの特色として、シリーズが県内と県外で多岐にわたることに加え、それぞれの楽曲も収録された社会主義期の演奏を再現することが可能となっている。ここでは、社会主義期の1960年代から1980年代にかけてアルトゥンコルで収録された曲の中から、当地の自然をうたった曲と、国外から持ち込まれてきたポピュラー音楽の2点を紹介したい。

9) *Baiguullagiyin Arkhivyn Ajlyn Undesniy Zaawar*, Ulaanbaatar. : Mongol Ulsyn Arkhivin Erunkhii gazar, 1998

10) た、モンゴル国立公文書館が編集した『Kino, duu, dursniy barimtyн khadgalalt, khamgaalaltyn zaawar[映画・音楽・映像資料の保全と保管マニュアル]』が2012年に出版されている。モンゴル国における映像音響系資料の保存方法を説明している。

（1）自然の表象

牧畜を生業としてきたモンゴル国のカザフ人は、その生業や風景としての自然をテーマに曲を演奏してきた。自然をテーマにした曲はカザフ人の民謡や民俗的な楽器の器楽曲（キユイ）の中で中心を占め、社会主義期に『モンゴル国のカザフ民謡¹¹⁾』や『バヤンウルギー県のカザフ人のドンブラとスズブグ（縦笛）の器楽曲¹²⁾』といった楽譜集にも蓄積がある。ここでは、これらの書籍に収録されていない、カザフ人による自然を表象した曲を紹介する。

1曲目は、ラジオ局のラジオ番組のシリーズ内（O.600）にある「Бес қопаның қамыс ай（5つの湿地帯に生える葦よ）」という曲である。この曲は、社会主義期の音楽劇団の演奏者であるコアンガンが、ドンブラ¹³⁾の伴奏で演奏した曲である。

（1番）5つの湿地の葦よ、（Бес қопаның қамысы-ай,）

ああ、なんて遠い場所にあるのだろう（Әттең жердің алысы-ай,）

目に映る熱き風景（Көзге ыстық көрінер,）

共に歩んだ、私をよく知る人よ（Бірге жүрген таныс ай,）

草が生え、肥沃な土地の小家畜のいる場所や（Шөбі шүйгін марқаның,）

水が…（不明な部分）…な草原の（Суы …（不明な部分）… арқаның,）

その知らせは知らなかった（Бір хабарын білмедім,）

遠くにいる、ああ、あなたたちよ（Алыстағы ай, қалқаның,）

（2番）5つの湿地にある葦よ（Бес қопаның құрағы-ай,）

燃えている灯よ（Жанып тұрған шырақ-ай,）

今いる場所から遠くに行こう（Елден алыс барамыз,）、

住処はどこなんだろう（Қай жерде екен тұрағы-ай,）

草が生え、肥沃な土地の小家畜のいる場所や（Шөбі шүйгін марқаның,）

水が…（不明な部分）…な草原の（Суы …（不明な部分）… арқаның,）

知らせは知らなかった（Бір хабарын білмедім,）

遠くにいるあなたよ（Алыстағы ай, қалқаның,）

この曲は、モンゴル国のカザフ人の典型的な民謡のメロディラインに沿って歌われている。

自然の情景を歌うとともに、歌い手が知る人々とのその場所や風景の情報が語られる民謡であると考えられる。こうした曲以外にも、自然と親族を重ねて歌う曲や、自然で鳴り響く音を、楽器の音で表現する曲が、アルトゥンコルには多数存在する。

（2）当時のポピュラー音楽

アルトゥンコルには、1960年代からバヤンウルギー県内で普及したカザフ語のポピュラー音楽も収蔵されている。カザフ語のポピュラー音楽の大半は、隣国のカザフ共和国（現在のカザフスタン）で制作されたものである。これらは、磁気テープや人づてで歌詞や旋律などが越境

11) Akhmerüli, Q., ed. *Mongoliya Kazakhtarnyn Khalyk Andery* [Kazakh Folk Songs in Mongolia]. Ölgii: Aimagiin Khevllel Uirdwel, 1984.

12) Akhmerüli, Q., ed. *Bayan-ölgii Kazakhtarining Dombira Jäne Sibizghii Küileri* [Kuis of Dombra and Sibizghii of Kazakhs in Bayan-Ulgii]. Ölgii: Aimagiin Khevllel Uirdwel, 1977.

13) ドンブラとは、カザフの民族楽器で、卵の形をした胴に竿が付いた、2本弦の撥弦楽器である。

して来たと考えられる。こうしたカザフスタンからの音楽の越境は1950年代末から行われている。ここでは、1950年代にカザフ共和国の音楽院を修了し、現在でもカザフスタンで頻繁に演奏される曲を作曲したシャムシ・カルダヤコフの「カイダスン (どこにいるの)」を取り上げる。この曲は、1968年というアルトゥンコル設立の初期に収録された曲で、1960年代にはカザフスタンの曲が一般の人々の中で演奏されてきたことが示唆される。非劇団員の演奏のシリーズに収録されているΘ.175の曲は、ザハンという女性歌手が民族楽器であるドンブラを用いて歌う曲である。

思い出に残るあの時、泉のほとりの出来事、(Сол бір кез есімде, Жағасы бұлақтың.)

月が上る夏の夜、共に過ごした長い夜。(Айлы жаз кешінде, Сырласқан ұзақ түн.)

あなたの端麗な顔が、いつまでも心に残る、(Сүйкімді бейненді Жүректе сақтадым.)

あなたという希望を、この場所で見つけたのだ。(Арманым, сол жерден, Сен едің тапқаным.)

「どこにいるの」という曲は、他の歌手も演奏しており、Өл.144では、劇団員の女性歌手がオーケストラのバックコーラスで演奏していたり、Θ.102には、1975年にアコーディオンを伴奏に弾き語りをする女性が演奏した曲が収録されている。いずれも、歌詞は同一であった。

本章では、アルトゥンコルに収録された楽曲を、自然に関する曲と当時知られていたであろうポピュラー音楽の歌詞から紹介した。こうした楽曲群は、現在でも演奏されているものもあるが、特に(1)で取り上げた自然に関する曲は、すでに人々からは聞くことがない曲であり、アルトゥンコルで唯一聞くことのできる曲である。

5. 音楽アーカイブズ資源の保管状況：乾燥地と磁気テープ、再生機器とデジタル化

既にアルトゥンコルにしか残されていない曲も多い中で、その保存状況は決して良いものではない。ここでは、音楽資料の保管状況を、乾燥地という環境下の影響、再生機器の劣化、音源のデジタル化の恩恵と弊害、そして収録音源の周知と活用の問題の点から述べる。

初めに、乾燥気候下での磁気テープの保管である。バヤンウルギー県は、ケッペンの気候区分でいうBWk(低温砂漠気候)である。湿気は一年を通して少ないものの、夏季(平均気温30度)と冬季(平均気温マイナス30度)の気温差は最大60℃にも達する。また、当県の標高は平均で海拔1500メートルに位置しているため、紫外線の影響を受けやすい。

こうした気候下にあるアルトゥンコルは、磁気テープの保管環境としては決して良いものではない。特に磁気テープは紫外線に弱く、太陽光にあたることで磁気テープの保存領域がはがれてしまうことや、テープが切れてしまうことが頻繁に起こった。こうした状況に対して、ラジオ局の職員は、磁気テープを太陽光のあたる窓際に置かないように注意していた。また、空調等が完備されておらず、室温を一定に保つことができない。

2点目に、磁気テープの再生機の問題である。現在のバヤンウルギー県地方ラジオ・テレビ局では、社会主義期のハンガリーで生産された磁気テープ再生機Mechlabor STM-600を用いている(写真3の奥)。STM-600は、1976年以降に製造が開始された再生機である。アルトゥンコルで用いている機械は、社会主義期に勤務していた元ラジオ局員によると、1980年代末に東ヨーロッパから贈られたものだという。既に使用開始から30年以上が経過しており、機械の不具合も頻繁に発生し、故障すると磁気テープ自体が聞けなくなる。

3点目に、デジタル化による恩恵と弊害である。バヤンウルギー県地方ラジオ・テレビ局は、2009年に国家予算によってコンピュータ機器を導入し、ラジオ番組の作成を全てデジタル化した。その過程で、アルトゥンコルにある全ての磁気テープもデジタル化することとなった。しかし、外部からの人の出入りが激しく、職員外の人が所持するUSBメモリを通じて、コンピュータウイルスに感染し、過去3度も音源データの消去を余儀なくされた。筆者の行ったデジタル化は4回目である。近年まで管理体制が脆弱だったといえる。

このデジタル化作業は、磁気テープ再生機とミキサーを接続し、更にミキサーとパソコンを接続して行っている。パソコンには、Adobe社のauditionのソフトが入っており、磁気テープを再生した際に、取り込み中の音源を波形で示す。この波形を適切な音量に変更してデスクトップ上の各シリーズに分類されたフォルダに保存する。筆者が磁気テープの

収録音源のデジタル化に参加した際は、磁気テープの中身を聞きながら、mp3音源を作成した（写真4）。小型の磁気テープの場合は、3分～5分で1つのデジタル化が終了するが、大型の磁気テープになると、40分から1時間の再生時間がかかるため、一日に処理できるデジタル化の量も少ない。

4点目に、収録音源の周知と活用の問題である。アーカイブズがアーカイブズとして機能するためには、収蔵物の保存だけでなく、活用の部分も考慮しなければならない。筆者がデジタル化に関わった際、アルトゥンコルの収蔵音源の内容は、一部の関係者のみにしか知られておらず、収蔵楽曲を利用も一部にとどまっていた。その利用の大半が、ラジオ番組「トゴズ」内で放送される数曲であり、ラジオ局内で利用が完結している。

一方で、アルトゥンコル内に祖父や祖母の音源があると聞いた若者や中年のカザフ人が、アルトゥンコルにあるデジタル化された音源をUSBに保存しに来る、という出来事を筆者は幾度か見かけた。曲を受け取った彼らは、嬉しそうに、家に帰ったら家族で聞くと教えてくれた。現地のカザフ人にどこの誰が歌った曲なのかを具体的に明示できるリストがあるならば、より多くの人々が活用できるものになるだろう。



写真3 2018年時点のアルトゥンコルの部屋
（窓から日光が差し込む）



写真4 磁気テープ内の曲のデジタル化の作業風景
（2018年筆者撮影）

以上で述べてきたように、アルトゥンコルの状況は、アーカイブズとしての保管技術の欠如と再生機器の老朽化が、デジタル化作業の足かせとなっている。加えて、その収録音源の利用の大半が、ラジオ局内で完結しているため、収録音源が具体的に活用される場面が少ない。

6. 結論と展望：社会主義期の音を残すこと

本稿では、モンゴル国のカザフ音楽アーカイブズであるアルトゥンコルを対象として、その設立の過程と、収録音源の維持に関する課題を明らかにしてきた。

旧ソ連圏の音楽アーカイブズに関する先行研究では、首都や都市部に音楽が集積される傾向が述べられた。しかし、アルトゥンコルは、地理的に周辺に位置する音楽アーカイブズとして設立された。このアーカイブズを所有したラジオ局の設立は、当時の国際関係に強く影響を受けたものであった。ラジオ局の下で、磁気テープとその内容が収集されたことで、アルトゥンコルは多数の現地の演奏者の音楽を残すこととなったのである。アルトゥンコルに収録された曲は、社会主義期にモンゴル国のカザフ人が演奏した音楽を復元できるようになった。これまで知られていなかった曲や、彼らがモンゴル国のカザフ音楽を歌っただけではなく、カザフスタンのカザフ音楽を演奏してきた時期や内容を具体的に示すものとして重要な資料となっている。

アルトゥンコルは、旧ソ連圏では珍しい、少数民族の音楽アーカイブズである。ソ連圏では主にマジョリティの民族に対して、彼らの文化や芸能が優遇され、カザフ人といったマイノリティの民族文化は抑圧されてきたとされる¹⁴⁾。この抑圧の中で、アルトゥンコルは当時の少数民族の歴史を音で伝える重要な部門として現地社会で位置づけることが出来る。

今後の展望として、社会主義期に収録された音楽の目録化が目標である。現在のところ、アルトゥンコル内に紙媒体で残された目録をデジタルデータに変換し、実際残っている曲との整合性を合わせている。この目録の完成によって、過去に出版された楽譜集に収録された曲との比較研究や、内容を充実させた現地のカザフ音楽の楽譜集の制作の一助となるだろう。

謝辞

本稿は、平成30年度アーカイブズカレッジ（短期）の修了論文を改稿したものである。本稿の調査は、平成29年度・30年度科研費特別研究員奨励費（17J04497）と、平成30年度総合研究大学院大学比較文化学専攻学生派遣事業を用いて可能となった。調査では、バヤンウルギー県地方ラジオ・テレビ局と、モンゴル国科学アカデミー・歴史学考古学研究所にご協力いただいた。また、このような執筆の機会をいただいた国文学研究資料館の先生方に感謝いたします。

14) Bulag, Uradyn. *Nationalism and Hybridity in Mongolia*, Oxford: Oxford: Clarendon Press, 1998.

"Altyn qor" Archive of Kazakh music in Mongolia
—its establishment and maintenance

YAGI Fuki

Music archives in the former Soviet Union have been reported to establish and maintain music archives in the capitals. Bayan-Ölgiy Province is located in the westernmost part of Mongolia, a former Soviet satellite country. In Bayan-Ölgiy Province, 90% of the population is Kazakhs. This study focuses on the situation of Kazakh music archives established in Bayan-Ölgiy Province in the 1960s. In Ölgiy city, the prefectural office of Bayan-Ölgiy Province, there is a branch of the Mongolian State Radio Station. A music archive called “Altyn qor” was established in the radio station. Since the establishment of Altyn qor, it has been working on recording various music on the magnetic tapes. Currently, Altyn qor stores over 2000 songs during the socialist period. In this article, using data from the digitalization of songs stored in Altyn qor, the author discusses the establishment process of Altyn qor, the characteristics of the collection, details of the stored songs, and the storage environment. After socialism collapsed, Altyn qor has faced challenges in the environment for storing magnetic tapes and the technical skills of digitization. Although there are some such difficulties, the songs in Altyn qor has potential for revealing the performance activities during the socialist period.